



失われていくものと残したいもの (アラスカ・エスキモー) [2]

田村幸誠 Tamura Yukishige (滋賀大学)

ヘラジカの頭

夏にアラスカの内陸部を車で走っていると、モーターボートを牽引しながら走っている車をよく見かける。日本だと漁港などで見られるあの釣り用の小型ボートだ。海から何百キロも離れていて大きな湖など全くないこの内陸で、どうしてモーターボートが車に引かれて走っているのかと、初めてアラスカを訪れたとき不思議に思った。しばらくして、エスキモーの友人に尋ねると、一言、「ハンティング」という答えが返ってきた。「ハンティングにボート？」と考え込む私を見て、エスキモーの友人は笑いながら、「来週、僕らについてくればわかるよ」とハンティングに誘ってくれた。

ハンティングに出かけてようやく合点がいった。ヘラジカなどの獲物を探す範囲が日本の小さな県ひとつくらいあったのだ。歩いて獲物を探すのではなく、大陸をゆっくり流れる川とその支流をボートで進みながら獲物を探し、見つけ次第上陸する。そして、夜は適当なところでテントを張り、また次の日、川づたいに獲物を探しながら奥へ進んでいくというスタイルだった。私たちは日に何度か、狩りを終えて帰ってくる別のボートとすれ違った。ぎょっとしたのは、ボートの先頭にヘラジカの頭が勇ましげに置いてあったことだ。2メートルを超えるヘラジカの頭は、近くで見ると人の胴体くらいの大きさがあり、発達した角は広げた大人の両腕以上の大きさがある。仕留めた獲物の頭を誇らしげに先頭に載せて、

ボートが悠然と村に帰っていくのである。

私たちは3日間で獲物を得ることができなかった。帰りに何気なく、「ボートの先頭にヘラジカの頭を載せられなかったね」とエスキモーの友人に話しかけると、彼は「カサク（エスキモー語で「白人」の意味）！ エスキモーは絶対にあんなことはしない！」と少し声を荒げた。別のエスキモーの友人が「動物に対するリスペクトが全くないんだ！」と言葉を投げ捨てた。先に私が見たのはヨーロッパ系アメリカ人のスポーツ・ハンティングの人たちだったのだ。狩りが近代化したとはいえ、エスキモーは今でも一頭仕留めるとその場で何時間もかけて毛皮、肉、内蔵ときれいに解体する。そして家に持ち帰ってからも、冬の干し肉を準備したり、肉を親戚に送ったり、コートを作ったり、一頭全てを無駄にしない習慣が残っている。一方、ヨーロッパ系アメリカ人は、ステーキにできる部分のみ、あるいは、戦利品として頭や角だけを持ち帰るのだと言う。エスキモーには、「動物が撃たれてくれるのは、命を自分たちに捧げてくれるつもりがあったからだ」という考え方がある。野生動物の命を奪うという点では、理性的に考えれば、角ひとつだけを利用しようと一頭全てを利用し尽くそうと同じことかもしれない。しかし、野生動物が撃たれて無惨に森の中に放置されているのを見ると、両者の考え方には雲泥の差があるのではないかと強く感じるのである。

表紙写真
について

アッシジの聖フランチェスコ

田嶋美砂子 Tajima Misako (星美学園中学高等学校)

昨夏、勤務校の研修でイタリアを訪れた。創立者ゆかりの地を巡る途中、アッシジに立ち寄った。アッシジはイタリア中部の小さな街で、中世の聖人フランチェスコが生まれ育ち、活躍した場所でもある。

写真はサン・フランチェスコ大聖堂。名前の通り、聖フランチェスコに捧げられた教会である。大理石の淡い桃色とオリーブや糸杉の茂るウンブリア平野の緑色が絶妙な対照をなし、美しい。付設された修道院の回廊で、この建物が13世紀の建立以来、ほぼその原形を留めていると

聞き、遙か昔の中世に思いを馳せた。

聖フランチェスコが生きた12～13世紀は教会が世俗的な富や権力を獲得していった時代である。それに反し、聖フランチェスコはキリストのように徹底して貧しく生きようと、すべての財を投げ捨てた。この清貧の思想はのちにマザー・テレサに多大な影響を与えたと言われている。また、太陽や月などのあらゆる自然物を「兄弟」、「姉妹」と呼び、小鳥にさえ説教したという伝説から、「環境保護の聖人」とも称される。

聖フランチェスコは「平和の祈り」



でも有名である。彼の作ではないが、その生き方をよく反映しているとして教会でしばしば唱えられる。主よ、わたしを平和の道具にしてください。

憎しみのあるところに愛を
静いのあるところに赦しを
分裂には一致を 疑いには信仰を
誤りには真理を 絶望には希望を
悲しみには喜びを 闇には光を

もたらすことができますように。(抜粋)

聖フランチェスコのような生涯を送ることは難しい。しかし、少なくともその精神は心の片隅に置いておきたいと強く感じた夏であった。